Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-27

桃園結義始末 : 「歴史小説」としての『三国志演義』の独自性に関する一考察

竹内, 真彦

(Citation)
未名,36:1-24

(Issue Date)
2018-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041684

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041684

桃園結義始末

「歴史小説」としての『三国志演義』の独自性に関する一考察

竹内　真彦

一　問題意識の所在

「歴史小説」と「歴史書（史書）」を分けるものは何か。

これが、本稿における根元的な問題意識である。しかし、簡単に答えられる問題ではないであろう。それゆえ、本稿では、もう少し限定した形の問いを立てたい。

現代の、ほとんどの読者にとって、歴史小説と史書の区別は自明なものに見えるし、近代以降の歴史小説に限れば、史書と混同されることは、まず、ないであろう。何となれば、そこに「作者」の「意思」を容易に見出せるからである。読者は、史書（先行テクスト）と歴史小説（後続テクスト）の間には、作者のみが介在すると想定すればよい。それゆえ、前者と後者との差異や齟齬を、作者の意思と理解するわけである。吉川英治『三国志』が典型であり、先行テクスト『通俗三国志』と吉川『三国志』との差異は、何らかの形で吉川の意思を反映していると捉えて大過ないであろう。(一)

しかし、これは、近代以降の「歴史小説」のほとんどが、個人としての「作者」を措定できるからに過ぎない。前近代に遡るならば、歴史小説本体と先行テクストとの区別は曖昧になる。例えば、『太平記』は文学研究の対象

となる一方で、その同時代性ゆえに、「従来の学者歴史家によって南北朝時代における比較的一貫した、正確な史書であると認められている」[11]（『太平記』を「歴史小説」として扱うのも乱暴ではあるが、主として文学研究の対象となる点においては、歴史小説と共通する）。

特に、「述而不作（述べて作らず）」（『論語』述而第七）の伝統を持つ中国において、この傾向は顕著となる。本稿は『三国志演義』を主たる対象分析とするが、この『三国志演義』という書名は通称に過ぎない。諸版本の幾つかは『三国志通俗演義』を名乗り、別の幾つかは『三国志伝』と称する。また、『李卓吾先生批評三国志』なる版本も現存している。注目すべきは、いずれの書名も、正史『三国志』との関係性を意識している点である（「通俗演義」は内容の平明化を言い、「伝」は「註釈」の義であろう）。すなわち、我々が『三国志演義』と称しているテクストは、史書の従属物であることを言明しているのであり、自らを史書の延長線に置く。

つまり、『三国志演義』を「歴史小説」、正史『三国志』を「史書」と区別するのは、読者の意識に拠る。書名を見る限り、テクスト自体が内在的な区別を持っているわけではない。

しかし、内在的な区別は全く存在しないのであろうか。

近代以降の歴史小説のありように倣うのであれば、史書とは異なる、「作者の意思」の存在が確認できれば、そのテクストは内在的に史書と区別される、と言い得るであろう。そこで、極めて限定的ではあるが、『三国志演義』における、「作者の意思」の一端を摘出することを本稿の目的としたい。

二　摘出の方法

しかし、如何なる方法によって「作者の意思」は摘出できるのか。

最も確実なのは、『三国志演義』が、直接に拠った先行テクストを確定し、その先行テクストとの差異を明らかにすることであろう。差異がある、ということは、そこに何らかの意思の介在を想定できるからである。しかし、この先行テクストの確定が容易ではない。

周知の如く、『三国志演義』は、後漢末期から三国滅亡までを題材とする歴史小説である。魯迅は、『中国小説史略』において、『水滸伝』と『三国志演義』とを同じく「講史小説」に分類した。[三] しかし、現代的な視点で見れば、両者はやはり同じジャンルに属するとは言い難いであろう。決定的なのは、史書との距離感である。『水滸伝』『三国志演義』ともに、史書に登場する所謂「実在の人物」が多数登場する。しかし、『水滸伝』における「実在の人物」が『宋史』などの史書の記述からは大きく逸脱する行動を取るのに対し、『三国志演義』における「実在の人物」の行動は、正史『三国志』などの史書の記述に強く規制を受けている。すなわち、史書の記述からの逸脱は「ある程度」に抑えられている（『三国志演義』を指した「七実三虚」[四] という評語が象徴的であろう）。そこで、本稿では、『三国志演義』と『水滸伝』を同じジャンル（「講史小説」）とは認識しない。『三国志演義』について、史書からの規制を強く受ける、という意味を込め、「歴史小説」と称する所以である。

『三国志演義』（以降、特に誤解を生じない場合は『演義』と略称する）の叙述を規制する代表的な史書は、やはり正史『三国志』である。しかし、『演義』の利用した史書が正史『三国志』に限らないことも、しばしば指摘されている。[五] また、『世説新語』『三国志平話』（以下、『平話』）等、史書とは称せない先行テクストも数多く存在する。さらに、確認は不可能であるが、書記されず口承のみで存在したものの存在も想定される。すなわち、『演義』と先行テクストの差異を確定するためには、史書その他の先行テクストの広汎な渉猟が必須であり、なおかつ、それでも十全ではない、ということになる。

そこで、この不備を補うために、物語の「対称性」という考え方を導入してみたい。

三　「対称性」と「円環」

『水滸伝』七十回本の第七十回総批に言う。

> 或問。石碣天文。為是真有是事。為是宋江偽造。此痴人説夢之智也。作者亦只圖敍事既畢。重將一百八人姓名一一排列出來。為一部七十回書點睛結穴耳。蓋始之以石碣。終以石碣者。是此書大開闔。（石碑に刻まれた天のメッセージが本物なのか宋江のでっちあげなのかと問いたくなる者もいるだろう。この種の問いは無意味でつまらない。作者はたんに物語を終えるのにもう一度百八人の豪傑の名前を整理して一人ずつ列挙しようとしただけ――文字通りの画竜点睛なのである。石碑で始めて石碑で終わるというのは、いわゆる「大開闔」（大いなる幕開けと幕引き）である。[六]）

この批評を捉えて、王瑾（ジン・ワン）は、七十回本の改変者たる金聖歎が「構造的統一性に最高の地位を与えるような文学的フィクション機構に関心を抱いている」ことを指摘し、七十回本への改変を「神話的枠組み（the mythological framework）」への「閉じ込め(enclosure)」として理解する。さらに、これによって、『水滸伝』において、「物語のテーマである円環(cycle)が成就しないことから、構造的な対称性（a structual symmertry）へと向けかえることに成功」しているという。「この対称性は、円環に劣らず神話の語りの展開論理を強力に示すものである」とも。[七]王瑾はまた、『西遊記』と『紅楼夢』には「円環」が見出せるとも指摘する。

王瑾の指摘通り、前近代西洋と同様に、前近代中国においても、「神話的枠組み」は「物語」のありようを強く規定する、とは言えそうである。それでは、『水滸伝』などと同じく、明代白話小説の代表作の一つでもある『三

国志演義』もまた「神話的枠組み」に閉じ込められているのであろうか。もし、『演義』もまた「神話的枠組み」に閉じ込められているのであれば、これは、史書との明瞭な差異になり得る。

何故なら、史書の叙述が、「実際にあったこと」の「記録」という形を採る以上、少なくとも「物語」の展開という点で、王瑾のいう「円環」や「対称」という「神話的枠組み」に収まるはずもないからである（「事実は小説よりも奇なり」という手垢のついた物言いがその傍証となろう）。ならば、その史書の叙述に規制される『三国志演義』もまた、「神話的枠組み」から逸脱せざるを得ない、というのが論理的帰結である。

仮に、『三国志演義』が『三国志』などの史書とは異なり、「神話的枠組み」を志向するのであれば、前者は後者に従属していない、という物言いも可能であろう。

四　三国志故事の語る「円環」

実のところ、『三国志演義』に先行する『三国志平話』（以下、『平話』）の物語は、ある種の円環を描いているように思われる。

『平話』は、冒頭の転生譚を除けば、黄巾の乱を契機とする後漢の衰退から説き起こし、三国分立から晋による統一を経て、その晋が劉淵の建国した漢に滅ぼされるまでを語る。すなわち、『平話』の物語的枠組みは「衰えた漢が復活する」ものなのであり、これをして「円環を描く」ということは可能であろう。

つとに指摘されるところであるが[八]、『平話』の描き出す、「漢の復活の物語」は大筋のところで「史実」と合致する。ただし、『平話』が劉禅の外孫（娘の子？）として設定する劉淵は、歴史上は、劉禅ひいては、その父であり、三国の一つである蜀漢の建国者たる劉備との血縁関係はない。歴史上の劉淵は南匈奴出身であり、漢族ですらなか

った。

逆に言えば、非漢族ではあるが同姓の劉淵を、劉備の子孫と位置づける、たった一つの虚構によって、『平話』は円環を描いて見せるわけである。一つの虚構だけで成立している点に鑑みれば、そもそもの「史実」が円環性を持っていたとも言えるし、円環を描くためには、やはり史実を逸脱した虚構が必要であった、とも言える。

いずれにしろ、『演義』に先行する『平話』は「衰えた漢が復活する」という円環を描く。しかし、『演義』は、この円環を採用するわけにはいかなかった。元代、すなわち非漢族王朝において成立した『平話』と異なり、漢族王朝である明代において成立した『演義』にとって、非漢族出身の劉淵を、「前漢景帝の玄孫」たる劉備の子孫に位置づけることは許容できるものではあるまい。

ならば、『演義』は円環を抛棄するのか。

筆者は、『平話』とは異なる方法で、『演義』もまた円環を描き出す志向を持つと考える。『演義』の物語の終盤、蜀漢を滅ぼした魏は、代代の重臣である司馬一族出身の司馬炎に帝位を「簒奪」されることになる。この際、『演義』は司馬炎に「吾與漢家報讎（私は漢王室のために仇を報ずるのだ）」と言わせている。つまり、この後、司馬炎が建国する晋を漢の後継者と位置づけるわけである。この物語を、『平話』と同じく、「漢が復活する」ものと解釈することは不可能ではない。(九)

とは言え、皇帝の姓は「劉」から「司馬」に、国号は「漢」から「晋」に代わるわけであるから、同じ姓、同じ国号で復活する『平話』ほど明快ではない。また、『平話』が、後漢から蜀漢、蜀漢から劉淵の漢へと繋ぐのに対し、『演義』において、晋は断絶していた後漢を復興するのであり、蜀漢の後継者とは位置づけ難い（そもそも、司馬炎の祖父である司馬懿は、蜀漢の丞相、諸葛孔明の北伐にとって最大最強の敵であった）。すなわち、『演義』の物語が

円環を描くとしても、先行する『平話』の持っていた明瞭な円環は、その一部が損なわれている。そして、それは、『演義』の物語が史書に規制されていることが原因だと言ってよいであろう。

つまり、三国志故事を「漢の衰退から復興」という円環を描くものと捉えた上で、『平話』と『演義』を比較したとき、史書による規制は神話的枠組みを損なうほど強力だ、ということになる。

となれば、『演義』のような、ある程度成熟した「歴史小説」において、「神話的枠組み」は、史書の規制によって崩壊してしまう程度に脆弱なものでしかない。換言すれば、「歴史小説」は、史書から独立した「閉じた物語」にはなり得ず、史書のモノマネでしかないことになる。

本当にそうなのだろうか。

五　桃園結義

以下、円環ではなく、「対称性」を『演義』に見出せないか、という観点で論じてゆきたい。

不求同年同月同日生。但願同年同月同日死。（同年同月同日に生まれることを求めず、但だ同年同月同日に死なんことを願う。）

『演義』第一則「祭天地桃園結義」において、物語の主人公たる劉備、関羽、張飛の三人によって為された、有名な誓約である。「桃園結義」として知られるこの誓約は、史書には現れない。つまり、「桃園結義」をめぐる登場人物たちの言動は、史書の規制を受けようがない「虚構」だと言い得る。そして、この誓約が守られ、三人が「同年同月同日に死」んだならば、物語は「対称性」を備えると言ってよいであろう。

しかし、『演義』の読者は、「桃園結義」の誓約が履行されないことを知っている。まず、後漢の建安二十四（二

一九）年、孫権軍に捕らえられ、関羽は刑死する（『演義』第一五三則「玉泉山關公顯聖」）。その二年後、蜀漢の章武元（二二一）年、帝位に就いた劉備は、関羽の仇討ちのため、大軍を興して呉に攻め込む。しかし、先鋒を任された張飛は、開戦前に部下に殺されてしまう（同第一六一則「范强張達刺張飛」）。さらに二年後、蜀漢の章武三（二二三）年、独り残された劉備は白帝城において病歿する（同第一六九則「白帝城先主託孤」）。つまり、劉備、関羽、張飛は「同年同月同日に死ぬ」ことはできなかった。ここにおいて「対称性」は見出し得ない。

『演義』の描き出す三人の死は、史書のそれと大略一致する。すなわち、史書の規制を受けた叙述であり、物語における虚構である「桃園結義」は成就せずに破綻しており、虚構は、史書の規制の前に、「対称性」を失わざるを得ない、かのように見える。

六　劉関張の子孫たち

しかし、『演義』の叙述はそう単純ではない、と筆者は考える。『演義』の物語は、最終盤に至って、劉備、関羽、張飛の子孫たちの最期を「集中的に」語るからである。

まず、『演義』第二三四則「諸葛瞻大戰鄧艾」を見よう。

蜀漢の炎興元（二六三）年冬十一月、魏の鄧艾は、蜀漢領の奥深く、首都成都の目前にまで迫る。これを綿竹にて迎撃したのは、諸葛孔明の子である諸葛瞻、そして瞻の子である諸葛尚であったが、この諸葛父子には、張遵、黄崇、李球という三将が従っていた。

諸葛瞻と諸葛尚は奮戦するも鄧艾軍に敗れ、戦死する。その直後、『演義』は次のように言う（引用は『演義』劉龍田本に拠る[一〇]）。

鄧艾憐其忠義。將諸葛父子葬于城西。遂乘勢取綿竹。張遵、黄崇、李球殺出。亦被殺死。遂引兵來取成都。張遵乃張飛之子。黄崇乃黄權之子。李球乃李恢之子。(一一)(鄧艾はその忠義を憐れみ、諸葛父子を城の西に葬る。そして、勢いに乗って綿竹に攻めかかった。張遵、黄崇、李球は懸命に脱出を図るが、すべて殺されてしまった。かくて、鄧艾は兵を率い成都に向かう。張遵は張飛の子、黄崇は黄権の子、李球は李恢の子である。)

後述するように、史書にあっては、張遵は張飛の子ではなく、孫に当たる。いずれにせよ、諸葛孔明の子、孫とほぼ同時に、張飛の子孫が国を守ろうとして戦死しているわけである。

続く第二三五則「蜀後主輿櫬出降」において、成都城外に布陣した鄧艾の軍に恐怖した蜀帝劉禪は降伏を決定する。これに激烈に反対したのは、劉禪の第五子劉諶であった。劉諶は、降伏を唱える譙周を斬り、徹底抗戦することを主張するが聞き入れられない。結局、憤激の餘り、劉諶は昭烈廟(劉諶の祖父である劉備の廟)の前で自刎してしまう。

劉禪の降伏により蜀漢は滅んだ。その功は、鄧艾に帰するものである。しかし、鄧艾とともに蜀漢に攻め込んだ魏将鍾会、その鍾会と対陣して動きが取れず、おめおめと首都を落とされた蜀将姜維にとって、到底納得できる結果ではなかった。そこで、鍾会は鄧艾を排除せんと考え、一方の姜維は鍾会に偽降した上で、鍾会の狙いに乗じて、起死回生の蜀漢復活を図る。

その結末は悲劇的なものであった。鄧艾と鍾会の双方を除きたい、魏の権力者司馬昭の意向も絡み、最終的に、鄧艾、鍾会、姜維いずれも乱軍の中に死ぬこととなる(『演義』第二三七則「姜維一計害三賢」)。そして、乱軍に死んだのは、この三人だけではなかった(引用は先と同じく『演義』劉龍田本に拠る)。

姜維、鍾會、鄧艾已死。張翌(ママ)戰歿于亂軍之中。師纂等分其屍。太子劉璿、漢壽亭侯之孫關彝皆戰敵。被魏

兵所殺。[一二]（姜維、鍾會、鄧艾は已に死んだ。張翼は乱軍の中に死に、師纂等はその屍をズタズタにした。太子劉璿と、漢寿亭侯の孫関彝も抗戦したが、魏兵に殺害された。）

劉禅の太子、すなわち劉備の孫である劉璿、漢寿亭侯、すなわち関羽の孫に当たる関彝もまた、死去しているわけである。

つまり、『演義』は、蜀漢滅亡の前後において、桃園結義の当事者たる、劉備、関羽、張飛の孫たちの死を語っている。これをもって、「桃園結義」をめぐる物語は、やはり「構造的な対称性」を保持している、とは言えないだろうか。

七　史書における張遵の最期

劉関張の子孫たちの死が、史書の叙述そのままであるのならば、そこに「対称性」を見出すのは牽強附会に過ぎるであろう。そこで、史書における叙述を確認する。

まず、張遵について確認しておこう。

正史『三国志』[一三]では、蜀書・張飛伝の末尾において張遵の死が語られる。

長子苞。早夭。次子紹嗣。官至侍中尚書僕射。苞子遵為尚書。隨諸葛瞻於緜竹。與鄧艾戰。死。[一四]（張飛の長子張苞は早逝した。次子の張紹が後を嗣ぎ、侍中、尚書僕射にまで昇った。張苞の子、張遵は尚書となり、諸葛瞻に従って緜竹で鄧艾と戦い、死んだ。）

張遵の死に限れば、『三国志』の叙述は、前節で確認した『演義』の叙述とほぼ一致する。しかし、張遵と同時に死んだ黄崇と李球についての言及はない。

正史『三国志』において、黄崇と李球の死は、それぞれ蜀書・黄権伝、李恢伝において語られる。

權留蜀子崇。為尚書郎。隨衞將軍諸葛瞻拒鄧艾。到涪縣。瞻盤桓未進。崇屢勸瞻宜速行據險。無令敵得入平地。瞻猶與未納。崇至于流涕。會艾長驅而前。瞻却戰至綿竹。崇帥厲軍士。期於必死。臨陳見殺。[一五]（黄権は蜀に子の黄崇を留めており、黄崇は尚書郎となった。衛将軍の諸葛瞻に従い、鄧艾を禦ぐために涪県に到った。諸葛瞻が滞陣したまま進もうとしなかったため、黄崇は諸葛瞻に速やかに行軍して険阻に拠り、敵が平地に入れぬようにすべきだと何度も勧めた。しかし、諸葛瞻がこれをなかなか受け入れなかったため、黄崇は涙を流した。鄧艾は長駆して進み、諸葛瞻は戦いつつ綿竹にまで後退した。黄崇は士卒を督励して死戦したが、ついに戦死した）（黄権伝）

子遺嗣。恢弟子球。羽林右部督。隨諸葛瞻拒鄧艾。臨陳授命。死于緜竹。[一六]（李恢の子、李遺が後を嗣いだ。李恢の弟の子、李球は羽林右部督となり、諸葛瞻に従って鄧艾を禦いだ。戦陣にあってその命を棄て、緜竹に死んだ。）（李恢伝）

『演義』劉龍田本は、張飛の「孫」である張遵を「子」と誤るばかりでなく、李恢の「弟の子」である李球をもまた、「子」と誤っている。しかし、その点を措けば、『演義』の叙述は史書に準拠していることになる。しかし、正史『三国志』に拠って、『演義』の叙述を成立させるためには、蜀書・張飛伝、黄権伝、李恢伝（及び諸葛亮伝・後主伝）を参照するという煩瑣な作業が必要となる。

ならば、『資治通鑑』『資治通鑑綱目』といった編年体の史書に拠ったのであろうか。試みに『資治通鑑』[一七]巻七十八の該当箇所を引く。

諸葛瞻督諸軍拒艾。至涪。停住不進。尚書郎黄崇。權之子也。屢勸瞻宜速行據險。無令敵得平地。瞻猶豫未納。崇再三言之。至于流涕。瞻不能從。艾遂長驅而前。擊破瞻前鋒。瞻退住緜竹。艾以書誘瞻曰。若降者。

必表為琅邪王。瞻怒。斬艾使。列陳以待艾。艾遣惠唐亭侯忠出其右。司馬師纂等出其左。忠纂戰不利。並引還。曰。賊未可擊。艾怒曰。存亡之分。在此一舉。何不可之有。叱忠纂等。將斬之。忠纂馳還更戰。大破斬瞻及黄崇。瞻子尚歎曰。父子荷國重恩。不早斬黄皓。使敗國殄民。用生何為。策馬冒陳而死。(二八)(諸葛瞻は諸軍を督して鄧艾を禦いだ。涪に至ると、進軍を止めた。尚書郎の黄崇は黄権の子であったが、諸葛瞻に速やかに行軍して険阻に拠り、敵が平地に入れぬようにすべきだと何度も勧めた。しかし、諸葛瞻はこれを容れなかった。黄崇は再三進言し、涙を流すまでに至ったが、諸葛瞻は従わなかった。鄧艾は長駆して進み、諸葛瞻の先方を撃破。諸葛瞻は緜竹まで撤退した。鄧艾は信書を送り、「もし降伏するならば、琅邪王とするよう上表せん」と誘ったが、怒った諸葛瞻は鄧艾の使者を斬り、布陣して鄧艾を待ち受けた。鄧艾は子の恵唐亭侯鄧忠を右より、司馬の師纂等を左より出撃させた。しかし、鄧忠と師纂は劣勢となり、ともに退却した。「賊を撃破することはまだ無理です」と二人が報告すると、鄧艾は怒って、「存亡はこの一戦にかかっている。退却など有り得ぬ」と、鄧忠、師纂等を叱責し、斬罪に処そうとした。鄧忠と師纂は前線に馳せ戻って再戦を挑み、敵を大破して諸葛瞻と黄崇を斬った。諸葛瞻の子、諸葛尚は、「我ら父子は国家の重恩を受けながら、速やかに黄皓を斬らなかったばかりに、国を破り、民を失った。生きていることができようか」と嘆き、馬に鞭打って敵陣に突撃し戦死した。)

ここには張遵と李球に関する言及はない。また、引用は割愛するが、『資治通鑑綱目』も、同様に諸葛瞻と諸葛尚及び黄崇の名を挙げるのみである。すなわち、『資治通鑑』『資治通鑑綱目』に拠って、『演義』の叙述を為すことはできない。

ならば、やはり、『演義』の叙述は正史『三国志』の再構成であるのか。

八　『演義』と『蜀漢本末』

この問いについて、井口千雪の指摘が、重要な示唆を与えてくれる。

『三国志演義成立史の研究』[一九]の中で、井口は、該当する箇所は限定的であるが、『演義』が『蜀漢本末』なる史書を参照していることを指摘する[二〇]。その上で、『演義』嘉靖壬午序本に見える、劉璿と関彝の最期に関する叙述にも言及し、「嘉靖壬午序本が基づいた史書は『蜀漢本末』とみなすのが自然である」[二一]と結論づける。

劉璿と関彝の最期に関する叙述が、『蜀漢本末』の影響下にあるならば、前節で見た張遵の最期もそうではないのか。ところが、その確認にはやや障碍がある。

『蜀漢本末』は元・趙居信の撰。「蜀を漢の正統な後継とみなし、『本末体』で書かれた史書であ」り、「元の至正十一年（一三五一）に、『演義』出版の中心地であった建安（現福建省南平市建陽区周辺）で刊行された」[二二]。

影印本は複数刊行されているが[二三]、管見の限り、いずれも底本は、至正辛卯（十一年、一三五一）の年記を有する中国国家図書館蔵本に拠る。しかし、この中国国家図書館蔵本には、複数の缺葉が存する。そして、綿竹の戦い、すなわち、張遵の最期が記されている可能性がある箇所もまた、生憎なことに缺けている。

現在のところ、筆者は中国国家図書館蔵本以外を底本とする『蜀漢本末』のテキストを確認できていない。そこで、本稿では、日本国立国会図書館の所蔵する清代の抄本[二四]に拠り、『蜀漢本末』の記述を確認する。

諸葛瞻督諸軍拒艾。至涪。停住不進。尚書郎黄崇。屢勸瞻宜速行據險。無令敵得入平地。瞻猶豫未納。崇再三言之。至于流涕。瞻不能從。艾遂長驅而前。擊破瞻前鋒。瞻退住緜竹。艾以書誘瞻曰。若降者。必表為琅邪王。瞻怒。斬艾使。列陣以待艾。艾遣兵攻破之。瞻及王崇、尚書張遵、羽林右部督李球皆戰死。瞻時年三十七。其子尚歎曰。父子荷國重恩。不早斬黄皓。使敗國殄民。用生何為。策馬冒陣而死。遵。飛之孫。崇。權之

子。球。恢之弟子也。

その叙述の大略は、前節に引いた『資治通鑑』と一致するため、訳文は省略する。しかし、傍線を引いた二箇所は、『資治通鑑』とやや異なる。すなわち、一つは、鄧艾側の叙述が簡略化され、鄧忠と師纂が登場しないこと。もう一つは、末尾に、張遵、黄崇、李球の血統が記されること、である。ここでは後者に注目する。

第六節に引いた、『演義』劉龍田本第二三七則にあっても、末尾に（うち二名は誤っているとは言え）この三名の血統が記されていた。つまり、『蜀漢本末』の叙述と構成が類似しているわけである。

先に述べたように、井口千雪は、『演義』嘉靖壬午序本が、劉璿と関彝の死を叙述する際、『蜀漢本末』の影響を受けていることを指摘する。これに、『演義』劉龍田本における、張遵等の死の叙述を考え合わせれば、井口の指摘以上に、『演義』と『蜀漢本末』の関係は深い、と言い得るであろう。

なお、井口は、張遵の死については言及していない。『演義』に先行する『蜀漢本末』（中国国家図書館蔵本）が張遵の死の叙述を缺き、彼女の研究の主目的が、『演義』成立史にある以上、むしろ当然であろう。本稿で利用した『蜀漢本末』清抄本は、『演義』嘉靖壬午序本や劉龍田本に遅れて抄写されたものであり、文献学の手続に従えば、これをもって、『演義』の先行テクストとして扱うことは杜撰に過ぎる。

さらに附言しておく。ここまでは、『演義』劉龍田本の叙述のみを採り上げて来たが、それは、実のところ、この版本の叙述が『蜀漢本末』のそれと、管見の限り、最も近しいためである。『演義』の別版本を確認すると、叙述の様相は異なって来る。この問題については、本稿末尾の附考において検討したい。

九　『演義』の「意思」

本稿の目的は、先行テクストとは異なる『演義』の独自性、別言すれば『演義』の意思を摘出することであった。『演義』劉龍田本において、劉備、関羽、張飛によって為された「桃園結義」は、当人たちの代において果たされなかった。けれども、孫の代に至り、劉璿（と劉諶）、関彝、張遵は蜀漢滅亡に殉じ、「同年同月同日」とまでは言わぬものの、生死をともにする、という誓約は果たされたように見える。すなわち、そこに「対称性」という、先行テクストの規制から離れた『演義』の独自性が見出せるようにも思われる。

しかし、前節において確認したように、『演義』劉龍田本の叙述については、先行テクスト『蜀漢本末』との類似が指摘できる。つまり、先行テクストの規制から逃れていたわけではなく、『蜀漢本末』という先行テクストが、餘り知られていなかったゆえ、独自性があるように見えていたに過ぎない、ということになる。

だが、そうであっても、『演義』の独自性を摘出する餘地が残っている。

何故なら、『蜀漢本末』末尾に置かれる「総論」に次のように見えるからである。

中外死節之臣十有餘人。亮、羽、飛、雲之子孫居半焉。(二五)（〔蜀漢滅亡の際、〕国内外で節義に殉じた臣は十餘名あったが、諸葛亮、関羽、張飛、趙雲の子孫が半ばを占める。）

さらに註記が続く。

緜竹之敗。諸葛亮之子瞻。瞻之子尚。張飛之孫遵。皆死之。沓中之敗。趙雲之子廣死之。成都之亂。關羽之孫彝死之。(二六)（緜竹の敗戦にあっては、諸葛亮の子である諸葛瞻、瞻の子である諸葛尚、張飛の孫である張遵が死んだ。沓中の敗戦では趙雲の子である趙広が死んだ、成都の乱では関羽の孫である関彝が死んだ。）

『蜀漢本末』は、蜀漢滅亡の際、諸葛亮、関羽、張飛、趙雲の子孫が、その国難に殉じたことを特記する。ここで注目すべきは、趙雲の子である趙広である。『蜀漢本末』の言う「沓中之敗」の叙述を確認しよう。「総論」では

「緜竹之敗」の後に「沓中之敗」を置くが、時系列では、「沓中之敗」が先行する。

秋。魏遣鄧艾、鍾會將兵入寇。關口守將傅僉死之。大將軍維與魏兵戰於彊川口。敗績。還守劍閣。牙門將趙廣戰死。[二七]（〔炎興元年、二六三〕秋、魏は鄧艾と鍾会に軍を率いて侵攻させた。この際、関口の守将であった傅僉が戦死した。大将軍の姜維は魏兵と彊川口で戦ったが敗れ、退却して剣閣を守った。牙門将の趙広が戦死した。）

この叙述は、事件の大要を示したものであり、この後に、詳細を記した記述が続く。そして、その末尾に、「傅僉。彤之子。趙廣。雲之子[二八]（傅僉は傅彤の子、趙広は趙雲の子である）」と記す。

一方、『演義』を確認する。劉龍田本第二三一則「鍾会鄧艾取漢中」において、傅僉の死については言及がある。しかし、これに続く、沓中の戦いの叙述において、趙広に関する言及は一切ない。すなわち、『蜀漢本末』とは明らかに力点が異なる。

正史『三国志』蜀書・趙雲伝に言う。

次子廣。牙門將。隨姜維沓中。臨陳戰死。[二九]（〔趙雲の〕次男趙広は牙門将となった。姜維に従って沓中の戦に臨み、戦死した。）

つまり、趙広の戦死は史実である。そして、『蜀漢本末』は、その死に言及した上で、趙雲とのつながりを確認する。これに対し、『演義』は趙広の死について、一切言及しない。

ここに、『蜀漢本末』と『演義』の「意思」の相異が看取できるように思われる。『蜀漢本末』が重視したのは、「死節之臣」であり、その半数が、諸葛亮（孔明）、関羽、張飛、趙雲という劉備にとっての「宿将」の子孫であったことを強調する。しかし、『演義』は、趙雲の子孫たる趙広の死を記さなかった。すなわち、『蜀漢本末』よりも叙述の対象は限定的であり、（黄崇や李球にも言及するとは言え、）その力点は、劉関張、すなわち、桃園結義の当

事者たち（の子孫）の死、すなわち、物語の「対称性」を描くことにあった、と解釈し得るのではないか。

十　小結

冒頭に述べたように、前近代における、「歴史小説」と「歴史書」との間に、内在的な区別はあるのか、というのが筆者の根元的な問題意識である。そのために、「歴史書」には見えない、「歴史小説」の「独自性」を摘出することを、本稿における方法とした。

その結果、『演義』の物語は、「歴史書」が持たぬであろう「対称性」を備えているのではないか、というのがひとまずの結論である。

些か牽強附会の謗りを受けるものではあろう。また、極めて微細な叙述に拘泥していることも自覚している。しかし、「歴史小説」が「史書」の従属物ではなく、独自性を備えている可能性を示したかったのである。

蛇足ながら、第七・八節で言及した、『演義』における、張遵の死に関する叙述が持つ意義を附け加えておきたい。

第八節で確認したように、『演義』における張遵の死が、『蜀漢本末』を先行テクストとする可能性は高い。しかし、現存する『蜀漢本末』至正刊本自体には、張遵の死を記すであろう箇所が缺けており、本稿では清代の抄本に拠って、これを補ったのであった。

一方、『演義』劉龍田本の出版年代は確定し難いが、状況証拠はある。同系統の版本が、明代後期から明末（十六世紀末～十七世紀前半）にかけて、劉龍田本と同じく福建で陸続と刊行されていることに鑑みれば、劉龍田本もまた、この時期の刊行と考えて大過あるまい。つまり、『蜀漢本末』清抄本より、時系列的に先行するのである。[三〇]

本稿で使用した、国会図書館蔵の『蜀漢本末』清抄本は、至正刊本と比較すると、文字の配列がほとんど一致しており、至正刊本を忠実に抄写したものだと判断できる。しかし、当然のことながら、至正刊本の缺葉部分については比較対象が存在しないのであるから、忠実な抄写であるか否かは、厳密に言えば、「判らない」と言うべきであろう

だが、少なくとも張遵の死および、その死の原因である、綿竹の戦いを記す箇所については、『演義』劉龍田本の存在が、『蜀漢本末』清抄本が、至正刊本に忠実であろうことを担保する。つまり、「歴史小説」（『演義』劉龍田本）が、「史書」（『蜀漢本末』清抄本）の叙述内容を保証する、という事例になっているわけである。

附考　『演義』諸版本の様相

周知の如く、『三国志演義』には数多くの版本が存在し、各版本間には多数の相異が存在する。そのため、『演義』研究に際しては、複数の版本を参照することは必須となる。さもなければ、『演義』の一版本を参照したに過ぎず、『演義』の全体像に対する研究になり得ない。

しかし、本稿では、『演義』劉龍田本に限定して論を進めてきた。そこで、以下、第六節に引用した、第二三四則「諸葛瞻大戰鄧艾」における張遵の死、及び第二三七則「姜維一計害三賢」における劉璿と関彝の死の叙述について、別版本を確認したい。

とは言うものの、数ある『演義』諸版本をすべて参照することも難しい。ここでは、比較的古態を留めていると思しい、嘉靖壬午序本、余象斗本と、第六節に引いた劉龍田本の三者に限定して検討する。『演義』版本研究における分類に拠れば、嘉靖壬午序本は二十四巻本系、余象斗本は二十巻繁本系、劉龍田本は二十巻簡本系と、各々別

系統に属する。

実のところ、嘉靖壬午序本と余象斗本における、劉璿と関彝の死の叙述が異なることは、すでに井口千雪が指摘している。すなわち、嘉靖壬午序本に登場する関彝が、余象斗本においては登場しないのである[三二]（そして、第六節で確認した通り、劉龍田本にも関彝が登場する）。

さて、ここに挙げた三種の版本のみならず、現在、存在が確認されている『演義』諸版本には、未発見である共通の祖本（「原演義」）が措定できる。それを前提として、この「関彝の不在」について、井口は次のように指摘する。

> 原演義が余象斗本のように「皇族」としていたのを嘉靖壬午序本に至る過程で「関彝」に書き換えたのであっても、原演義が嘉靖壬午序本のように「関彝」としていたのを余象斗本が恣意的に「皇族」と書き換えたのであっても、いずれかの段階で『蜀漢本末』が参照されたことはやはり間違いない[三三]。

井口は、余象斗本の叙述に鑑み、「原演義」のこの箇所が『蜀漢本末』を参照していない可能性も考慮する。その一方で、『演義』第一七三則から一八〇則において語られる、孔明の南征については、「原演義」の段階で、『蜀漢本末』が利用されているとも、井口は指摘する。となれば、余象斗本の叙述が、嘉靖壬午序本に比して、「原演義」に近い、という仮定は、「原演義」が、孔明の南征においては『蜀漢本末』を参照し、劉璿の死を記す際には参照していなかった、という結論を導く。そして、嘉靖本と劉龍田本に至る過程で、再び、『蜀漢本末』が参照されたことになる。

これは、些か複雑な演変と言わざるを得ないであろう。『蜀漢本末』を参照した結果、記されることになった関彝に関する言及が、余象斗本に至る過程で削除された、という想定の方が素直である。

そして、井口の言及しない、張遵の死の叙述を検討すると、やはり、「余象斗本による削除」という蓋然性が高そうである。以下、嘉靖壬午序本[二三]（嘉）、余象斗本[二四]（余）と、劉龍田本（劉）について、第二三四則「諸葛瞻大戰鄧艾」の当該箇所を引用する（劉龍田本については、第六節の引用と重複する。なお、訳文は省略する）。差異が明確となるよう、三者を並列して示す。

（嘉）鄧艾憐其忠　。　父子合葬　。　乘虛攻打緜竹。張遵、黃崇、李球［球乃李恢弟之子。］三人各引一軍殺出。蜀兵寡。魏兵重。三人死戰不脱。力窮勢孤而亡。艾因此得了緜竹。勞軍已畢。遂　來取成都。未知如何。[二五]

（余）鄧艾憐其忠義。令將諸葛父子俱葬於城西。遂乘勢取了綿竹。張遵等皆死。　引兵徑襲成都。未知如何。[二六]

（劉）鄧艾憐其忠義。　將諸葛父子　葬于城西。遂乘勢取　綿竹。張遵、黃崇、李球　殺出。　亦被殺死。　遂引兵來取成都。張遵乃張飛之子。黃崇乃黃權之子。李球乃李恢之子。[二七]

嘉靖壬午序本の引用中に現れる、［球乃李恢弟之子。］は夾註である。附言すれば、嘉靖壬午序本は、張遵、黃崇についても、この則における初登場時に、やはり夾註の形で、それぞれ「張飛之孫」「黃權之子」と記す。

文面としては、三者の関係は定め難い。その点についての深入りは避け、張遵が三者に共通して登場する一方で、嘉靖壬午序本と劉龍田本には登場する李球が、余象斗本には登場しない点に注目したい。

第八節において、劉龍田本における、張遵の死の叙述については、『蜀漢本末』の影響が認められると指摘した。

それは、張遵、黄崇、李球の死に言及し、なおかつ三名の血統が記されるゆえであった。そして、この特徴は、血統の記される箇所と形式が異なるとは言え、嘉靖壬午序本にも共通する。

余象斗本には、李球が登場せず、残る二名の血統についても言及がない。しかし、張遵に対して言及していることが重要であろう。

第七節で確認した如く、『資治通鑑』及び『資治通鑑綱目』の該当箇所には黄崇が現れるのみで、張遵と李球は登場しない。一方、第八節で見たように、『蜀漢本末』には、三名すべてが登場する。すなわち、余象斗本の当該箇所に張遵が登場することには、『蜀漢本末』の影響を看るべきである。李球が登場しないのは、削除によるものなのであろう。

となれば、前述した第二三七則における、余象斗本における「関彝の不在」も、削除による現象である可能性が高かろう。

注

（一）吉川英治『三国志』が、主に依拠したであろう『通俗三国志』は、元禄年間に刊行された、『三国志演義』李卓吾批評本の邦訳とされる。すなわち、吉川は、史書を主たる先行テクストとしたわけではないが、吉川『三国志』と『通俗三国志』を比較すれば、吉川の「意思」がある程度摘出できる、という点で、本稿における、先行テクストと後続テクストの関係にある。

（二）後藤丹治、釜田喜三郎校注『太平記　一』（『日本古典文学大系』三四、岩波書店、一九六〇年）、「解説」、二一頁。

（三）魯迅「中国小説史略」（テキストは『魯迅全集』「人民文学出版社、一九八一年」第九巻所収のものに拠る）、「第十

四篇　元明傳來之講史（上）」「第十五篇　元明傳來之講史（下）」参照。

（四）清・章学誠「丙辰劄記」に見える、『三国志演義』に対する評語。

（五）代表的な研究として、上田望「講史小説と歴史書（一）――『三国演義』、『隋唐両朝史伝』を中心に」（『東洋文化研究所紀要』第一三〇冊、九七～一八〇頁、東京大学東洋文化研究所、一九九六年三月）が挙げられる。なお、井口千雪『三国志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一八年）は、その一六〇～一六一頁において、上田論文を含め、先行研究をまとめているので参照されたい。また、井口『三国志演義成立史の研究』自体が、『演義』が如何に史書を利用したかを詳細に論じている。

（六）『水滸伝』七十回本のテキストは、『第五才子書施耐庵水滸伝』（中華書局影印本、一九七五年出版）に拠る。引用箇所は、巻七十五第一葉b。訳文は、註（七）所掲『石の物語』三九二頁所収の廣瀬玲子訳に拠る。

（七）この段落の引用文は、すべてジン・ワン（王瑾）著・廣瀬玲子訳『石の物語：中国の石伝説と「紅楼夢」「水滸伝」「西遊記」を読む』（法政大学出版局、二〇一五年）三九二頁に拠る。なお原書は、Wang,Jing, *The Story of Stone: Intertextuality, Ancient Chinese Stone Lore, and the Stone Symbolism in Dream of the Red Chamber, Water Margin,and the Journey to the West*,. North Carolina: Duke University Press, 1992.

（八）金文京『三国志演義の世界』（東方選書、東方書店、一九九三年）八九～九〇頁、『三国志平話』における民族と国家」を参照。

（九）拙稿「『三国志演義』の結末に対する一試論――司馬炎を起点として――」（『未名』第十五号、中文研究会、一九九七年三月、五五～八四頁所収）を参照。

（一〇）『三国志演義』劉龍田本のテキストは、陳翔華主編『三国志演義古叢刊五種』（全八冊、中華全国図書館文献縮微複

製中心、一九九五年）所収の『喬山堂本三国志伝』に拠る。

（一一）註（一〇）所掲書巻之二十第十二葉a。

（一二）同前巻之二十第十八葉b。

（一三）正史『三国志』のテキストは中華書局一九八二年排印本に拠る。

（一四）註（一三）所掲書九四四頁。

（一五）同前一〇四五頁。

（一六）同前一〇四六頁。

（一七）『資治通鑑』のテキストは中華書局香港分局一九七二年排印本に拠る。

（一八）註（一七）所掲書二四七一～二四七二頁。

（一九）書誌については註（五）参照。

（二〇）註（五）所掲井口千雪『三国志演義成立史の研究』三八九～四一〇頁「第六章　『三国志演義』と『蜀漢本末』」参照。

（二一）同前四三一頁。

（二二）同前三八九～三九〇頁。

（二三）管見の限り、『四庫全書存目叢書』、『中華再造善本』金元編・史部、『閩刻珍本叢刊』に収録されている。なお、本稿においては『四庫全書存目叢書』所収の影印本を、『蜀漢本末』のテキストとして使用する。

（二四）国立国会図書館書誌IDは［000007516643］、永続的識別子は［info:ndljp/pid/2605490］。

（二五）註（二三）所掲『蜀漢本末』巻下第四十四葉b。

（二六）同前第四十四葉b～第四十五葉a。
（二七）同前第二十七葉b。
（二八）同前第二十九葉b。
（二九）註（一三）所掲書九五一頁。
（三〇）『三国志演義』諸版本に関しては、中川諭『「三国志演義」版本の研究』（汲古書院、一九九八年）を参照。
（三一）註（五）所掲井口千雪『三国志演義成立史の研究』四二八～四三一頁参照。
（三二）同前四三一頁
（三三）嘉靖壬午序本のテキストは、『三国志通俗演義』（全八冊、人民文学出版社、一九七五年排印本）に拠る。
（三四）余象斗本のテキストは、註（一〇）所掲の陳翔華主編『三国志演義古叢刊五種』（全八冊、中華全国図書館文献縮微複製中心、一九九五年）所収の『双峰堂本批評三国志伝』に拠る。
（三五）註（三三）所掲書巻之二十四第二十八葉b。
（三六）註（三四）所掲書巻之二十第十五葉a。
（三七）註（一〇）所掲書巻之二十第十二葉a。

（たけうちまさひこ・龍谷大学教授）